"トータル・コーディネイター"
林 雅弘氏が語る

天才児 レイ・ミステリオ オフ・ザ・リングの素顔

今、世界で最も売れているマスクマンといえば、WWEで活躍中のレイ・ミステリオだろう。
そのマスクとコスチュームの製作を手がけている"トータル・コーディネイター"が、
『SOLLUNA』代表取締役・林　雅弘氏だ。初来日から現在まで、
ミステリオとの交遊を通して林氏が知った、天才児の"素顔"とは……。

[取材&構成◎小野　仁／撮影◎斎藤豊]

チ枠に組まれた宿敵シコシスとの入カー

衝撃の初来日！"スペル・ニーニョ"との遭遇

持ち前のバネのしなやかさと驚異的な跳躍力で空中戦の世界に革命をもたらした"天才児"レイ・ミステリオ。その初来日は1995年の暮れ、WARが主催した『Super J-Cup 2nd Stage』(12月13日・両国国技館)のリングが舞台だった(当事のリングネームはレイ・ミステリオ・ジュニア。先代ミステリオは叔父)。スペシャルマッチで、本戦のトーナメントを食ってしまう衝撃の日本デビュー。

"スペル・ニーニョ"(天才少年)との触れ込みで前評判の高かった弱冠21歳のミステリオは、期待を裏切らないウルトラC級の飛び技を連発し、この1試合のみで日本における評価を揺るぎないものにした。今ではミステリオと切っても切れない関係にある林雅弘氏も、その華麗なる空中技に魅了された一人だった。

縁あって高校時代から全日本プロレスの入場テーマ曲の製作に関わってきた林氏は、最近の作品にはフベントゥ・ゲレーラの入場曲がある、パトリオットの来日を機にレスラーのマスク、さらにはコスチューム作りを手がけるようになる。マスクの製作は小学5年生頃から始めていた。

そうしてレスラー・関係者の横のつながりで人脈を広げていった林氏は、WARマットの常連だったライオン・ハートことクリス・ジェリコから初来日のミステリオを紹介されたのだった。ミステリオのファイトにいっぺんで魅せられた林氏は、翌96年4月の2度目の来日を待ち構えて、熱烈な売り込みをかける。

なんと、ミステリオのためにマスクとコスチュームを製作し、「(その間も)電話で連絡は取っていたんですけど―そのことには触れずに」来日初戦の試合地・札幌まで計6セットを持参したのである。今度は、ミステリオがいっぺんで林氏の腕前に惚れ込んだ。

「これから作ってくれ！」いう話になりまして」、それまでメキシコのメーカー(プシオ)が受注していたミステリオのマスクとコスチュームの製作を林氏が一手に引き受けることになった。

言わば、ミステリオのトータル・コーディネイターに就任したわけだ。

その直後(同年6月)にミステリオはメキシコからアメリカに主戦場を移してWCW入り。口コミでWCWのレスラー間に林氏の作品の評判が広まり、"林ブランド"がアメリカへ輸出されていった。

さて、ディーン・マレンコやエディー・ゲレロから金星を挙げるなど、WCWマットでは主にクルーザー級戦線で大活躍を見せたミステリオだったが、99年2月21日、『スーパーブロウル』カリフォルニア州オークランド大会で、スーパーヘビー級のケビン・ナッシュに条件付きタッグマッチで敗れ、マスクをはがされてしまう。

これでミステリオのマスクマン生命は絶たれたかに思われた。"覆面王国"メキシコで生まれ育ったミステリオ自身、マスクを脱いだり被ったりという発想はなかった。ひとたび素顔をさらした以上、同じキャラクターには戻れないのがマスクマンの宿命だと考えていた。

ナッシュにはがされた、この黒のマスクは、林氏にとって特に思い入れの深い一枚である。PPVで行われるビッグマッチのために製作した入魂の一作を、記念に残しておきたいと願う林のもとに、マスクはナッシュから返還された。これが最後のマスクだと、作り手の林氏も、そしてミステリオ自身も思っていた。

第2回スーパーJカップ(95年12月13日・両国国技館)に初来日スペシャルマッチで"天才少年"はシコシスを相手に驚異的な跳躍を見せる者を魅了した

昨年夏のWWE日本ツアー初日(7月17日・横浜アリーナ)では、『ハルク』に変身。全身を緑にペイントして登場したが…

(写真提供・林　雅弘氏)

ヒーロー大好き。変身願望の強い無邪気な大人!?

。ところが、WCWがWWF（現WWE）とのレスリング・ウォーに敗北し、2001年春に崩壊したことによって、事情が変わった。WWEとの契約を待つミステリオにオファーが届いたが、マスクマンとしての登場がWWEのリクエストだった。ここでプロとして割り切ることにしたのか、マスクマンへの再変身をミステリオは選択。WWE登場に際し、リングネームから「ジュニア」も外された。

呪縛から解き放たれたミステリオは、ファンの記念撮影の求めに素顔で応じるようになった。「"マスク＝顔を隠すもの"みたいな感覚は、今の彼には絶対ないですね」とは林氏の弁。マスクもコスチュームの一部ととらえ、会場外ではコスチュームに身を包んで歩くことがないのと同じように、ことさらファンの前だからといって素顔を隠す必要はないと考えているのだろう。

ただし、そのかわり、魅せるべきところでは魅せる。WWE初登場以来しばらくの間は、PPVと毎週のTVマッチに合わせてマスク&コスチュームを新調。また、元来ヒーローアクションが大好きで変身願望の強いミステリオは、しばしば映画（「スパイダーマン」、「デアデビル」など）やコミックのキャラクターになりきってきた。

もちろん、その都度、マスクとコスチュームを製作するのは林氏である。「（WWEに参戦するようになって）最初の半年間ぐらいは、もう大変でした」。毎週の定期放送に加え、ミステリオはWWE登場まもなくPPVマッチのレギュラーとなったため、月に5セット以上を製作しなくてはならなかった。「1セット作るのに丸々2日間はかかるんですよ」

手の込んだマスクとコスチューム一揃いを2～3日で作り上げてしまうのかと、素人としては感心させられてしまう。

とはいえ、それでも毎月5セットを製作するとなれば、単純にひと月の内の3分の1から半分が費やされる計算になる。現在では

「本当に一

製作にあたり、「基本的には『次は何色がいい？』と（基調となる色を）聞くだけですけど、（ミステリオから）"何々になりたい！"とリクエストされることもあります。"今度はコレやろ!?"と思ってると、向こうも同じことを考えていたり」と、ミステリオとは以心伝心。鉄壁のタッグワークを誇る。

そんな名コンビにも、時には"失敗"がある。昨年夏のWWE日本ツアー中、横浜アリーナ2連戦の初日（7月17日）のこと。ミステリオは"緑色の怪人"ハルクに変身して登場。しかしながら、大観衆は「???」といった反応を示した。それもそのはず、まだ日本では「ハルク」の上映が開始されていなかったのだ……。

AAAからWCW、そしてWWEへと、ひたすら出世街道をひた走ってきたミステリオ。彼と常に近しく接してきた林氏の感想は「ホントにラッキーやな、思いますね。ちょっとでも"落ちたな"って感じた瞬間がない」というもの。いつも明るくニコニコ笑っていて人当たりの良いミステリオは、「ドレッシングルームのボス的な立場の人間に取り入るのが天才的にうまい（笑）」のだとか。

WCW時代は年齢的に若く、リング上の扱いにおいてもクルーザー級はクルーザー級と区切りをつけられ、ヘビー級の一段下に置かれていたきらいがあったが、WWE入りするとWCWマットでのミステリオのファイトをテレビで観戦していたレスラーが周囲に多かったためもあり、ドレッシングルームでも一目置かれる存在となった。

アメリカマットに定着し、成功を収めたミステリオはカリフォルニア州サンディエゴに居を構え、これまでに3度、家を購入している。よほどサンディエゴが気に入っていると見え、オリジナルムーブの名称まで同地にちなんでネーミングしている。実は、「619」とはサンディエゴの市外局番を指すのだ。

ここで話は再び昨年夏の日本ツアーに戻る。初日のハルク変身が観客に伝わらなかったショックも忘れた（？）3連戦の最終日（7月19日）、神戸ワールド記念ホールのリングへ向かうミステリオのロングタイツには、"619 TO 078"の文字が躍っていた。078は神戸の市外局番。「619が神戸へやって来たぜ！」というスペシャルメッセージが、この日限りのコスチュームに込められていたのだ。

もちろん、そのようにきめ細かなファンサービスの陰には、"トータルコーディネイター"林氏の存在があるのは言うまでもない。だが、林氏は「僕はお手伝いしているだけ」と謙遜する。ミステリオの自己プロデュースに対するこだわりがあってこそ、林氏のセンスも光るのだ。

「専用のステージから飛び上がって現れる、あの入場シーンも自分で考えたアイディアだと言ってました。それと、コスチュームの着こなし。多少きつかろうが緩かろうが、うまく着こなすなと。そのへんは助かってます（笑）。アクセサリー一つをとっても、見映えということをすごく考えてますね」（林氏）

昨夏の日本ツアー最終日・神戸大会のバックステージにて（写真提供・林 雅弘氏）。「619 TO 078」は、神戸のファンへのさりげないメッセージ。写真上は619を繰り出すミステリオ

プロ意識の高さが表れたディテールへのこだわり

サンディエゴの邸宅にはコスチューム専用の部屋があって、マスクも「破れてしまったものも含めて全部」保管されている。いかにミステリオがマスクを大切に考えているかがうかがえる。林氏が聞いたところによれば、前述の日本ツアーの際、日本円にして15万円ほどの高額でマスクを譲ってほしいとマニアに懇願されたのだが、この申し出をミステリオは断ったという。

ミステリオには、ドミニク君（6歳）とアリヤちゃん（3歳）という2人の子供がいる。林氏は、この子供たちのハロウィン用の衣装まで製作しているとのこと。長男のドミニク君がまた父親に性格が似ていて、「ミニ・ミステリオに始まって、今度はラ・パルカになりたい、何々になりたいって……」と林氏も苦笑するほど。いや、父親が子供っぽいと言うべきだろうか。

それはともかくとして、エル・イホ・デ・レイ・ミステリオ（あるいは2代目"レイ・ミステリオ・ジュニア"？）の誕生は、まだまだ先のことになるはずであるから、それまで天才児ミステリオの鮮やかな空中技を満喫するとしよう。

「1600cm台の選手がここまで活躍するなんて、以前は考えられなかったですよね。今でこそ、いろいろな小さい選手が脚光を浴びてますけど」、それはミステリオの功績にほかならない。その意味では、「今やミル・マスカラス以上の存在と言えますよね」と林氏。

（来日第1戦の前夜に）初めて会ったときは、同年代のふつうの青年だと思いましたけど（ミステリオは林氏の1歳年下）、次の日に試合を見て正直、感動しました」。彼ならやれるだろうと、現在のミステリオの成功を林氏は予見していた。

"スペル・ニーニョ"と呼ばれた天才児レイ・ミステリオは、林雅弘氏という絶好のタッグパートナーとともに、これからも数々のファンタジーを生み出していくに違いない。

最後の一枚になるはずだった思い入れの深いマスクと対面する林氏。これからも傑作が次々と生み出されていくことだろう